

◇ 「 努力の上の辛抱という棒を立てろ 」

10歳の頃、僕にとって忘れられない出来事がありました。ある日、友達の家に行ったらハーモニカがあって、吹いてみたらすごく上手に演奏できたんです。無理だと知りつつも、家に帰ってハーモニカを買ってくれと親父にせがんでみました。すると、親父は「いい音ならこれで出せ」と神棚の神の葉を一枚とって、それで「ふるさと」を吹いたんです。あまりの音色のよさに僕は思わず聞き惚れてしまいました。もちろん、親父は吹き方など教えてはくれません。「俺にできておまえにできないわけがない」そう言われて学校の行き帰り、葉っぱをむしっては一人で草笛を練習しました。だけど、どんなに頑張ってみても一向に音は出ません。諦めて数日でやめてしまいました。

これを知った親父がある日、「おまえは悔しくないのか。俺は吹けるがおまえは吹けない。おまえは俺に負けたんだぞ」と僕を一喝しました。続けて、「一念発起は誰でもする。実行、努力までならみんなする。そこでやめたらどんぐりの背比べで終わりなんだ。一歩抜きんでるには努力の上の辛抱という棒を立てるんだよ。この棒に花が咲くんだ」と。その言葉に触発されて僕は来る日も来る日も練習を続けました。そうやって何とかメロディーが奏でられるようになりました。草笛が吹けるようになった日、さっそく親父の前で披露しました。得意満面の僕を見て親父は言いました。「偉そうな顔するなよ。何か一つのことができるようになった時、自分一人の手柄と思うな。世間の皆様のお力添えと感謝しなさい。錐さりだってそうじゃないか。片手で錐さりは揉めぬ」努力することに加えて、人様への感謝の気持ちが生きていく上でどれだけ大切なことを、この時、親父に気づかせてもらったんです。

翌朝、目を覚ましたら枕元に新聞紙に包んだ細長いものがある。開けてみたらハーモニカでした。喜び勇んで親父のところに駆けつけると、「努力の上の辛抱を立てたんだろう。花が咲くのはあたりめえだよ」子ども心にこんなに嬉しい言葉はありません。あまりに嬉しいものだから、お袋にも話したんです。すると、お袋は、「ハーモニカは、3日も前に買ってあったんだよ。お父ちゃんが言っていた。あの子はきっと草笛が吹けるようになるからってね」僕の目からは大粒の涙が流れ落ちました。今でもこの時の心の震えるような感動は、色あせることなく心に鮮明に焼きついています。

（ タレント 桂小金治著 ）